

審査員特別賞

「親父の死が教えてくれたこと」

梶原 宏之さん

「よ～しっ、こい！ナイスボール！」。親父の低く、力のある、男らしい声がグラウンドに響く。小学校低学年の頃、私と年子の弟、そして親父の3人で畑仕事が終わった後、キャッチボールをしたことをよく覚えている。腕相撲や相撲、かけっこもよくしてくれた親父。「ソフトボールが入っているだぞ。」本当にソフトボールが入っているかのごとく隆起した太い二の腕によくぶらさがったものだ。不器用で飾り気がなく、いつも農作業のかっこをしていて、決しておしゃれではなかった親父だが、私達兄弟はとても尊敬し、大好きだった。

「宏之、天井が落ちてくるぞ！逃げろ！」地元勝沼の病院で入院していた親父の言葉が印象に残っている。親父は甲府の総合病院で肺がんの手術をし、あと半年持つかどうかだと医者から告知を受けていた。病状を知り、私は長男ということもあり、東京の企業（株）東芝を退社して、地元の教師となるため、山梨に戻ってきていた。山梨に戻ってきてから4ヵ月後の8月終わり、医者から、「お父さんは家に近い地元の病院に移って、家族や親戚に近いところにいたほうがいい」と言われ、勝沼の病院に入院した。強い薬でがんの痛みを和らげていたところ、幻覚を見たり、おかしいことを言うようになったりしい親父だが、ある日大きく目を見開き、突然、「行け！」力強く言った。私はクアラルンプールで行われるラグビーワールドカップ最終合宿へ参加するかどうかに迷っていたのだ。この強化合宿に参加しないと南アフリカで行われるワールドカップ本選のメンバー選考から外れることを親父は察していたのだ。「行け！」。親父の言葉に背中を押されて、私は出発した。

一週間の強化最終合宿が終わり、成田空港から東芝に移動し、駐車場に止めておいた車に乗り換える時だった。2時間ほど前に親父が逝ってしまったと母から電話があった。「お前が帰ってくるまで、葬式ができないから、お父ちゃんは今朝まで頑張ったんだよ。」母は言った。62歳というあまりにも短

い親父の生涯だった。涙が止まらない。中央道を勝沼に向かって運転したが、涙で目が曇り、何回も前が見えなくなった。拭っても拭っても、止めどなく流れてきた。走馬燈のように親父との思い出が駆け巡る。何で？もっと早く、酒飲みで、ヘビースモーカーだった親父に注意できなかったんだろう。こぶし大より大きくなるまで放っておいた肺がんに、何でもっと早く気づくことができなかったんだろう。

今私は、定期健診と2年に1度の人間ドックで、がんの早期発見、早期治療を具現することができている。時代が変わったと言え、そうなのかもしれないが、今の医療の仕組み、システムが、親父が若いときからあったのならば……。そう考えてしまう今日この頃である。病院嫌いだった親父は健診も嫌いで、家族がどんなにすすめても決して受けようとはしなかった。しかし、もっと強くすすめて、もっと早く受診させていれば、がんを早期に発見できたかもしれないし、親父の意識も変わり、酒やたばこも少しは控えたかもしれない。悔しく、やるせない気持ちは拭いきれないが、今は、これからの世代のことを考えていこうと気持ちを切り替えている。

豊かで、潤いがあり、幸せな人生。そして社会。心と体の健康は欠かすことのできないものである。心と体の健診の必要性は全世界で実証されている。私も教育者として健診、人間ドックのすすめを微力ながら実践していきたいと思う。

一番大切な人を守るために。